香川大学教育実践総合研究（*Bull. Educ. Res. Teach. Develop. Kagawa Univ.*），41：79－88，2020

新たな視点による中学校音楽科鑑賞領域における音楽の教材化に関する実践的研究（２）

岡田　知也　・　堀田　真央*
（音楽教育）　（附属坂出中学校）

760－8522　高松市幸町１－１　香川大学教育学部
*762－0037　坂出市青葉町１－７　香川大学教育学部附属坂出中学校

Practical Study about Becoming It the Teaching Materials of the Music in the Junior High School Music Department Viewing Domain by a New Viewpoint (2)

Tomoya Okada and Mao Horita*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522
**Sakaide Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 1-7 Aoba-cho, Sakaide 762-0037*

要　旨　本研究は，平成29年告示の学習指導要領で示された「新しい時代に必要となる資質・能力」のうちの「『学びに向かう力・人間性』の涵養」に焦点を当て，「主題による題材構成」によって鑑賞領域の授業を構築し，実践を行った。楽曲や作曲者への興味・関心の高まりについて，生徒の学習状況の観察やワークシートの記述内容を手がかりとして分析を行った。

キーワード　中学校音楽科　鑑賞領域　「学びに向かう力・人間性」の涵養　アイーダ
主題による題材構成

１．はじめに

鑑賞領域は，小・中学校音楽科の学習内容において，表現と並んで２つの領域を構成している。平成29年３月に示された新学習指導要領（以下「新学習指導要領」とする）においても同様に，内容は表現・鑑賞の２領域として示されている。その中で，第２学年及び第３学年の鑑賞領域の内容は，次のように示されている。

（１）鑑賞の活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら，次の（ア）から（ウ）までについて考え，音楽のよさや美しさを味わって聴くこと。

（ア）曲や演奏に対する評価とその根拠

（イ）生活や社会における音楽の意味や役割

（ウ）音楽表現の共通性や固有性

イ　次の（ア）から（ウ）までについて理解すること。

（ア）曲想と音楽の構造との関わり

（イ）音楽の特徴とその背景となる文化や歴史，他の芸術との関わり

（ウ）我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と，その特徴から生まれる音楽の多様性

また，現行の学習指導要領で初めて示された〔共通事項〕が引き続き今回も示されている。指導計画の作成と内容の取扱いについて，まず

「指導計画の作成に当たっては，次の事項に配慮するものとする」として「題材など内容や時間のまとまりを見通して，その中で育む資質・能力の育成に向けて，生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際，音楽的な見方・考え方を働かせ，他者と協働しながら，音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりするなど，思考，判断し，表現する一連の過程を大切にした学習の充実を図ること」と示されている。また「内容の取扱いについては，次の事項に配慮するものとする」として「音楽によって喚起された自己のイメージや感情，音楽表現に対する思いや意図，音楽に対する評価などを伝え合い共感するなど，音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り，音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう指導を工夫すること」及び「第１学年では言葉で説明したり，第２学年及び第３学年では批評したりする活動を取り入れ，曲や演奏に対する評価やその根拠を明らかにできるよう指導を工夫すること」と示されている。これらの記述から「生活や社会における音楽の意味や役割」を「新たな視点」として授業構築の切り口とし，現行の教科書においてはまだ取組が示されていない，新しい時代に必要となる資質・能力の３つの柱のうち「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」に焦点を当てた授業構築を，前回とは異なる題材楽曲を用い試みることとした。

このことについては，佐野（2005，p.32）が「実践現場において鑑賞にかかわる固定的な観念やパターン化された方法，例えば，教材の解釈や選択，学習過程でのかかわり，あるいは子どもの聴き方のとらえ方などを，複数の視点から問い直してみたい」と従来の固定的な観念によるパターン化された鑑賞の活動について警鐘を鳴らし，新たな複数の視点を設定する重要性に言及している。

ただし題材として異なる楽曲を用いるが，鑑賞の授業を構築するに際し，「楽曲による題材構成」ではなく「主題による題材構成」に基づくこと，また「新たな視点」を学習内容として設定すること，例えば前回の実践では「その作品をその時代に聴衆として聴いたのはどのような人々か」，「その聴衆に向けて，作曲者はどのように作品をアピールしたのか」，「それが音楽にどのような変化をもたらしたのか」といった内容であったが，これらについては前回同様とする。すなわち，音楽科の授業づくりにおいて従来から重視されている「教材を教える」のではなく「教材で教える」という授業構築及び実践の基本的な考え方を維持していくということである。

２．これまでの研究経過

本研究における前回の実践（岡田・堀田，2019）においては，中学２・３年上に掲載されている「交響曲第５番」を題材として授業を構築し，実践及び検証を行った。その結果，「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」に関しては一定の成果が得られた。しかし，以下のような課題も残ったのである。一つは，授業の学習指導過程における「対話的」な活動の時間を十分保証できない場面が生じたことである。もう一つは，一定期間継続して教科書に掲載されている他の楽曲を題材として，新しい視点による教材化を継続して図っていくことである。なお，本研究で使用している教科書は，平成20年改訂の学習指導要領に準拠したものである。新学習指導要領に準拠したものは，本年度は採択地域単位で検討がなされ，令和３年度より使用される予定である。

そこで前節でも述べたように，「新たな視点」として授業構築の切り口とし，新しい時代に必要となる資質・能力の３つの柱のうち「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」に焦点を当てた授業構築を，前回とは異なる題材楽曲を用い，試みることとした。

３．教材曲の選定について

学習指導要領において，鑑賞領域で取り上げ

る教材曲は，表現領域の歌唱教材と異なり共通教材という形で指定されていない。新学習指導要領においてもそのことは変わらず「鑑賞教材は，我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち，指導のねらいに照らして適切なものを取り扱うこと」と示されているのみである。

佐野（前掲）は教材楽曲の選択について「みんなによく知られ親しまれている楽曲で，小・中・高ともに扱える広がりと深まりをもつ楽曲，しかしともすれば，固定的な解釈やパターンで取り扱われてしまう楽曲を選択する必要がある」と，これまでも教材として取り上げられている楽曲を，あえて違う視点で深めていくことの重要性を示唆している。

今回取り上げたオペラ「アイーダ」は，平成元年告示の学習指導要領においてその第２幕第２場が中学校音楽科鑑賞領域の共通教材として指定され教科書に登場した，初めてのオペラ作品である。平成10年告示の学習指導要領において鑑賞領域共通教材の指定がなくなった後も，鑑賞の教材曲として，継続して教科書に掲載されている作品である。しかし，オペラを題材として扱った授業において，杉町ら（杉町・渡部，2007）が指摘しているが「グランド・オペラならではのスケール感や，歌手たちの豊かな声量に『すごい』という印象を持つ生徒が多数見られる反面，その感想は一過性のもの」であることが多いと筆者自身も感じていた。

そこで，生徒自身の音楽経験と結びつけつつ，新学習指導要領で示された，鑑賞の指導事項の（１）ア（ウ）「音楽表現の共通性や固有性」について考えが深まるような場面を「アイーダ」の中から選定することとし（ちなみに，「アイーダ」は全４幕７場からなる長大な作品），主題を「感情と音楽との関わり」と設定し，本題材で用いる教材曲を選定した。

オペラは声楽を中心とした音楽により物語が進行するが，舞踊，演劇，文学，美術など様々な要素が含まれているため，教材曲を選定するにあたっては，何に着目させるのか視点を明確にする必要があった。また，歌は独唱を始め，二重唱，合唱など様々な歌唱形態の作品で構成されている。オペラの中で，歌は登場人物の感情を生き生きと表現していることが魅力であると考え，個々の感情表現に着目できるように独唱の部分を取り上げることとした。

「アイーダ」は，主人公であるエチオピアの王女アイーダとエジプトの将軍ラダメスとの悲恋の物語である。二人の感情表現を比較することも可能であったが，アイーダと恋敵であるエジプト王女アムネリスの二人の女性の感情表現の対比が生徒にとって知覚しやすくなるのではないかと考え，第１幕アイーダが歌うシェーナ「勝ちて帰れ！」，第２幕のアムネリスとアイーダのやりとりが繰り広げられるシェーナと二重唱の中の冒頭のアムネリスの部分，第４幕冒頭のアムネリスが歌うシェーナを取り上げ，これらの教材曲を中心として題材構成を行った。

４．実践Ⅰ（平成30年度）について

（１）題材について

① 題材名：歌と感情 －オペラにおける表現を通して－

② 対象生徒：附属坂出中学校　第３学年　１クラス（39名）

③ 題材の目標

・音楽における感情表現に関心をもち，鑑賞の学習に主体的に取り組もうとしている。（音楽への関心・意欲・態度）

・音色，強弱，旋律，リズムについて知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受したことをもとに感情表現について考えをもち，楽曲のよさや美しさを味わっている。（鑑賞の能力）

④ 題材計画：全３時間

（２）第１時

① 目標

・自分の経験にもとづき感情表現において必要な音楽の要素について考えを深める。

・オペラについて知り，生活の中で取り上げられていることに気づく。

② 学習過程

（ⅰ）自分にとって歌とはどのような存在か考える。

（ⅱ）歌で感情を表現するために必要な音楽の要素を考え，自分にとって一番重要な要素とは何か考える。

（ⅲ）オペラについて知り，身近に使われているオペラの楽曲を聴く。

③ 指導の実際

（ⅰ）自分にとって歌とはどのような存在か考える。

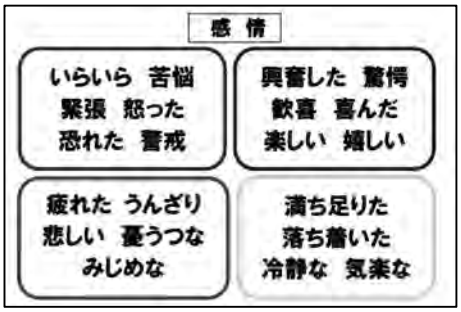
オペラで演奏される楽曲(独唱の楽曲)を身近に感じてもらうためにも，自分にとっての歌の経験，また，自分にとって歌を聴くことの効果について振り返らせた。生徒の反応としては，「気分転換」，「リラックス」，「ストレス発散」など自分の感情が動く経験をしているということであった。ペアで共有し，２，３人に全体の場で発表をしてもらい，感情と密接に関係していることをおさえた。

（ⅱ）歌で感情を表現するために必要な音楽の要素を考え，自分にとって一番重要な要素とは何か考える。

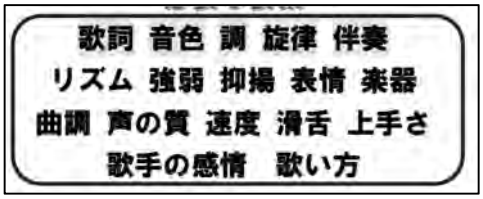
感情という言葉を取り上げたが，感情にはどのようなものがあるかワークシートに思いつくだけ書かせた。全体で共有しつつ，心理学での感情に関する研究で提唱されているラッセルの円環モデルを参考にどのようなものがあるか紹介し確認した。【図１】

そしてこれらの感情を表すためにどんな音楽の要素があるか自分の経験や学んだことをふまえ，思いつく限り書き出し，その中でもどんなものが大切なのか考えさせた。【図２】は生徒が考えた必要な要素であり，最上段のものは生徒たちの意見で出てきた一番必要な要素である。

【図１】



【図２】



（ⅲ）オペラについて知り，身近に使われているオペラの楽曲を聴く。

「歌」と言ってもいろいろなものを指すため，今回の「歌」は「歌詞にメロディがついており，さらに，伴奏があるものである」と定義し，この歌があるジャンルは何かと考えさせた。J-POP，洋楽など様々なジャンルがあるが今回はオペラを扱うことを伝え，テレビCMやスポーツ，特にフィギュアスケートで有名になった例を紹介し，オペラでも，感情を表現しているが，生徒たちが考えた要素で表現されているか次時確認していこうと，次時の目標を伝え，一時目を終えた。

（３）第２時

① 目標

・オペラ「アイーダ」のあらすじを知り，自分で考えた感情を表現するために必要な要素で知覚し，感受したことをもとに感情を表現の多様さについて考えることができる。

② 学習過程

（ⅰ）「アイーダ」の登場人物や人間関係を

確認する。

（ⅱ）自分で考えた一番必要な要素をもとに登場人物の感情を考えながら鑑賞する。

a）第２幕　アイーダ

b）第４幕　アムネリス

③　指導の実際

（ⅰ）「アイーダ」の登場人物や人間関係を確認する。

作曲者，アイーダが作曲された背景，及び登場人物について確認した。アイーダ，アムネリス，ラダメスの三人の関係については，第１幕の三重唱をDVDで鑑賞し，それぞれの思いを音楽や演技，歌詞から確認し，場面を捉えた。

（ⅱ）自分で考えた一番必要な要素をもとに登場人物の感情を考えながら鑑賞する。

前時にそれぞれが考えた，感情を表現するために必要な要素をもとに，音楽の特徴を知覚し，どのような感情を表現しているか考えるようにした。どのような特徴であるから，このような感情だろうと，知覚したことと感受したことを結びつけて語ることができていた。感じ取った感情については聴き取った要素が違っていても，同様のものとなり，どの要素に着目しても感情が伝わってくることを全体で確認した。

最後にもし，一つの要素だけになった時は感情を表現しているといえるのかと問い，考えをもたせ，次時につなげた。

（４）第３時

①　目標

・リズムに着目し，リズムがもつ意味や作曲者の意図について考え，一つの要素の大切さに気づき，音楽のよさや美しさを味わう。

②　学習過程

（ⅰ）一つの要素だけになった時，感情を表現しているかについて自分の意見を発表する。

（ⅱ）第２幕のアムネリスがアイーダに本心を聞き出す場面のティンパニの役割について考える。

（ⅲ）J-pop（「Lemon」米津玄師作詞・作曲）における間の意味を考える。

③　指導の実際

（ⅰ）一つの要素だけになった時，感情を表現しているかについて自分の意見を発表する。

授業を受けた39名中，一つの要素だけでも表現しているという立場は19名，分からないが１名いた。それぞれの経験やこれまでの学んだことをもとに語り，それを確かめていくために新たな場面を聴いていこうと次の活動につなげた。

（ⅱ）第２幕のアムネリスがアイーダに本心を聞き出す場面のティンパニの役割について考える。

まず，映像とともにどんな場面なのかを見て確認し，その後，音楽だけを流し，音楽の特徴とどんな感情を表しているのかについて共有した。その後，ティンパニの存在に気づかせるために，事前に編集しておいた音源（ティンパニの音を消している）を聴かせた。何が変化したか生徒は分からなかったため，何も編集していないものと編集したものを交互に流すと気づくことができた。

「私たちが気づかない存在だけど，ティンパニはいるのか？」と問いかけ，一人ひとり考えさせた。対話する中で，「気づかないし，いらない」と言う生徒，「アムネリスの裏の気持ちを感じる」という生徒両方いた。そこで，「それぞれの意見はどの立場で考えているものなのか」と問いかけると，聴いている人，登場人物という違いがあることに気づいた。そこで，登場人物の気持ちや作曲者の意図を考えてみようとつなげ，再度鑑賞させた。

（ⅲ）J-POP（「Lemon」 米津玄師作詞・作曲）における間の意味を考える。

音があることの意味について（ⅱ）の

活動で考えたが，音がない，つまり間を生かした曲があるということを紹介し，生徒の身近な曲な「Lemon」をかけた。間の存在に気づき，なぜ間をいれたのだろうと問いかけ，振り返りへとつなげた。

（５）生徒の反応

①　各時間の振り返り

毎時間の最後に振り返りを記述させている。生徒A（男子）の振り返りを紹介する。

（ｉ）第１時

普段身近に触れるのはJ-POPなどが多く，それらは感情の変化が分かりやすい。今回オペラを少し聴くと言語は分からないが変化があった。ならば，わかりにくくてもほぼ全てのジャンルに感情の変化があらわれているのではないだろうか。

（ii）第２時

字幕がないと歌詞はさっぱり分からない。しかし感覚でなんとなく感情は読めることができたから自分たちで考えた要素はあっていたと思う。

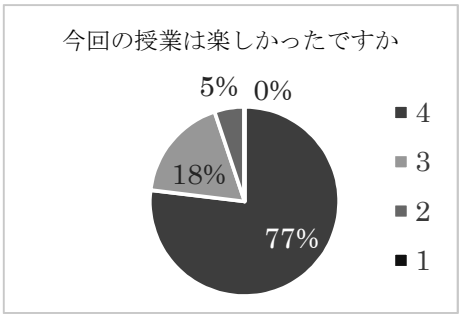
（iii）第３時

要素１つ１つにはそれぞれの役があり，作曲者の“意図”が隠されていると思う。その１つ１つが交わりあうことで“曲”としてできている。だから感情も表現できている。よって１つのことだけだと，他のものとの関わりがなくなってしまい“完成”していたものが不完全となってしまいみえるものもみえなくなってしまうと思う。アイーダの場合，たった少ししかないティンパニである。されどティンパニ。確かになくてもいいのかもしれない。聴き手には分かるかも知れない。作者の意図をよむのも面白さの一つだと思うので，全てがあってこそだと思う。

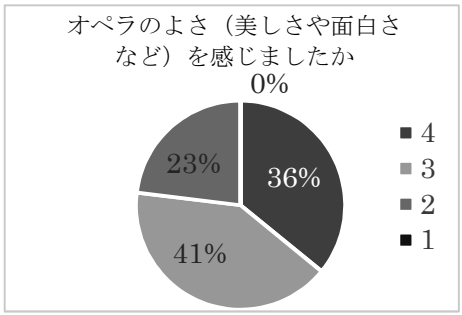
②　事後アンケート

授業クラス39名を対象として，質問項目について４段階評価を行わせた。（４が肯定的，１が否定的）

【図３】



【図４】



９割以上の生徒が今回の授業において楽しかったと答えている。楽しかった理由としては，「歌の捉え方が変わった」，「普段聴いている音楽との比較ができた」，「対話がたくさんできた」，「いろいろな視点で音楽を聴けて楽しかった」と答えている。オペラのよさ（美しさや面白さ）については，７割以上の生徒がよさを感じていたようで「感情がいろいろ表現されていて面白い」，「物語がおもしろい」ということを理由として挙げていた。しかし，２割の生徒については，「言語が分からないから」，「オペラは身近に感じられなかった」と理由をあげている。

③　考察

振り返りから，音楽の特徴としてあげられる要素に着目することで，生徒が鑑賞の視点をもち，楽曲のよさを感じることができたと考えられる。しかし，オペラ作品と

してのよさというのは感じられなかったことが，振り返りの記述やアンケートからもうかがえる。要素に着目して鑑賞することの楽しさは感じられたようであり，対話が授業中にたくさんできたことも理由として挙げている。楽曲を通して，オペラだからこそ感じるよさについても，授業中に取り上げることが必要であったと考えている。

（6）実践の成果と課題

成果として以下の２点が挙げられる。

・要素に着目することで，鑑賞の視点がはっきりし，また，感情を扱うことで，生徒が自分の生活の中での音楽とのつながりを感じることができていた。

・第１時に生徒の経験を引き出す活動を行うことで，自分がどのように歌を捉えているのか，自分の歌の聴き方が明確になり，それを活用して鑑賞を進めたことで，意欲的に授業に取り組めていた。

課題としては以下の１点を考えている。

・音楽の要素の大切さについては，授業を通して実感できていたようであるが，オペラそのもの，オペラだからこそ感じられるよさについては，生徒が実感することができていなかった。

５．実践Ⅱ（令和元年度）について

実践Ⅱは，実践Ⅰでの成果をふまえ，オペラならではのよさや「アイーダ」そのものの面白さを味わうことができるようにとの考えから授業構成を見直し実践したものである。

（1）題材について

① 題材名：感情と音楽 －オペラ「アイーダ」通して－

② 対象生徒：附属坂出中学校　第３学年 １クラス（40名）

③ 題材の目標

・旋律やリズム，強弱などの特徴と，オペラの要素である文学との関わりについて理解しようとする。【知識・技能】

・オペラ「アイーダ」やオペラそのもののよさや美しさについて，知覚したことと感受したこととを関わらせ，音楽による感情の表現の共通性や固有性について考え，味わって聴くことができる。【思考力・判断力・表現力】

・鑑賞の楽しさを体験することを通して，オペラのよさや美しさを見出そうと主体的に取り組み，オペラに親しもうとする。【主体的に学習に取り組む態度】

なお，実践Ⅱでは，新学習指導要領告示後，新たに示された評価の３観点に合わせて題材の目標を設定している。

④ 題材計画：全４時間

（2）第１時

① 目標

・オペラ「アイーダ」の第２幕第２場を鑑賞し，オペラを構成する要素や総合芸術と言われている理由を理解する。

・歌やオーケストラがオペラの中でどのような役割をしているか理解する。

② 指導過程

（ⅰ）事前に生徒へ行ったアンケートの結果をもとに，オペラ「アイーダ」の第２幕第２場を視聴し，オペラについて理解する。

（ⅱ）「アイーダ」のあらすじや登場人物の関係について，プレゼンテーションソフトを利用して説明し，恋の苦しみを味わった人物について考える。

③ 指導の実際

（ⅰ）事前に生徒へ行ったアンケートの結果をもとに，オペラ「アイーダ」の第２幕第２場を視聴し，オペラについて理解する。

事前のアンケートの結果から，多くの生徒が「オペラは高い声が印象的。一人で歌っている」と考えていたため，第２幕第２場を視聴し，オペラの基礎的な事柄についてアンケートもふまえながら説明した。

（ⅱ）「アイーダ」のあらすじや登場人物の関係について，プレゼンテーションソフトを利用して説明し，恋の苦しみを味わった人物について考える。

教材である「アイーダ」の物語の内容について説明した。作品の中で演奏される全曲について，歌唱する人物，歌詞の内容をまとめた一覧表を生徒に配布した。一覧表を見ながら「恋の苦しみ」をキーワードとして提示し，物語を捉え，一番苦しみを味わった人物は誰か考えさせた。次時の自分が選んだ登場人物の感情の変化と音楽の変化を捉えさせることにつなげた。

（3）第２時

①　目標

・選んだ登場人物に焦点を当て，映像で状況を理解し，音楽の特徴の変化をもとに苦しみがどのように表現されているか考えながら鑑賞することができる。

②　指導過程

（ⅰ）生徒それぞれが選んだ人物が歌唱している場面を聴き，どのような音楽の特徴によって恋の苦しみが表現されているか班で話し合う。

（ⅱ）恋の苦しみが変化しているのかについて考える。

③　指導の実際

（ⅰ）生徒それぞれが選んだ人物が歌唱している場面を聴き，どのような音楽の特徴によって恋の苦しみが表現されているか班で話し合う。

事前のアンケートで「感情を音楽で伝えるために必要なこととは何か」と質問したところ，歌詞や強弱が感情を伝えるためには必要と考えていたことをもとに，自分が選んだ登場人物が出てくる場面を聴き，歌詞や強弱だけかどうかを確かめさせた。

（ⅱ）恋の苦しみが変化しているのかについて考える。

苦しみを表すために，歌詞や強弱だけでなく，旋律も必要であるということを（ⅰ）の活動の中で生徒が見出した。次時の活動につなげるために，「恋の苦しみは変化しているのか」と発問した。すると変化していると生徒が答えたため，「恋の苦しみが高まった瞬間はどこか」とさらに発問し，これを確かめる活動を次時の活動とした。

（4）第３・４時

①　目標

・歌詞の内容から考えられる感情の変化と音楽の特徴の変化とのかかわりを捉え，登場人物の恋の苦しみについて再考することができる。

②　指導過程

（ⅰ）旋律に注目して登場人物の感情の変化について考える。

（ⅱ）オーケストラの旋律に注目して感情の変化について考える。

③　指導の実際

（ⅰ）旋律に注目して登場人物の感情の変化について考える。

「恋の苦しみが高まった瞬間はどこか？」という学習課題のもと進めた。カウントアップタイマーを使用し，どの瞬間であるかお互いに共有できるようにした。音程の変化や音が高くなった時という生徒が考えた手がかりをもとに聴取を進めた。

（ⅱ）オーケストラの旋律に注目して感情の変化について考える。

（ⅰ）の活動の中で，生徒の発言からオーケストラの音楽の特徴の変化ににについて着目する発言があったことから，それを全体に共有した。オーケストラの変化というキーワードでどのような特徴があるか聴取を進めた。

（5）生徒の反応

実践Ⅱでは，毎時間の振り返りは実践Ⅰと変わらずに行っていたが，事前アンケート，事後

レポートで生徒の音楽の役割についてどのように考えが変容したかを見とるために，同じ質問をした。また，主題の「感情と音楽との関わり」についてもどのように捉えたか分析するために事後のレポートで別の質問をしている。以下は生徒B（女子）の記述である。

① 質問：物語において音楽の役割にはどんな役割があるか

（ⅰ）事前アンケート

登場人物の表情や，気持ちを表す。人物像を表している。

（ⅱ）事後レポート

音楽で会場の雰囲気を作る役割があると思います。物語をそのまま音楽なしで作るのであれば，その人の登場人物の心情がわかりにくいと思います。送別芸能祭の練習でも，役者だけの練習に比べて音響と一緒に練習をすることによって，その場面ごとの登場人物の様子や心境を分かりやすくなったことがあると思います。役者だけでは作ることができない会場の雰囲気が音楽によって作られたり，迫力が出たりします。迫力や音楽によって会場に来てくれたお客様を飽きさせないような工夫がされているのではないかと思いました。役者が言葉を発するだけでは飽きてしまって，あまり興味をもつことはないけれど場面ごとに様々な音楽が使われることによってよりオペラを楽しいものにするのだと思います。

（ⅲ）考察

事後では「会場の雰囲気」を一番に出しており，オペラを学習したことによって観客の視点で音楽の意味や役割を考えていることが想像できる。また，これが学校行事の送別芸能祭と結びつけて語ることにつながっていると考えられる。しかし，オペラだからこそ気づくことができた音楽の役割か，という点では授業の見直しが必要である。「場面ごとに様々な音楽が使われる」という記述は，他の総合芸術でも考えることが可能である。

② 質問：歌に込められた感情を表現するために必要なこととは何か

（ⅰ）事後

歌詞やオーケストラとのバランスが必要だと思います。歌詞で心境を表していて，オーケストラでそのときの状況や物事を表したと分かったので，最初は，歌詞だけあればいいと思っていたけどオーケストラも重要だと思いました。また，歌詞だけ，オーケストラだけでももう一方の心境や状況が分からないので，バランス良くいると思います。心境で盛り上がった時，オーケストラでさらに盛り上げると見ている人も登場人物がどういう気持ちなのかを知ることができると分かりました。どちらか一つでも無くなるとバランスが崩れてしまってオペラとして成り立たなくなってしまうと思います。歌に込められた感情を表現するためには，歌詞やオーケストラとのバランスが最も重要になると思うようになりました。

（ⅱ）考察

歌詞について触れながら，感情を表現するオペラにおけるオーケストラの役割について考えを深めていることが分かる。この記述から，事前に生徒Bが歌に込められた感情を表現するためには歌詞が重要だと考えていたことも分かる。オーケストラという視点が増えたことにより，この学習を通して，新たな視点で音楽と関わることに繋がっていくのではないかと考えている。記述には生徒Bの考えが多く表れているが，考えの変容のきっかけをつくった音楽の特徴が表れていない。さらに授業内容の検証や記述のありかたを考えていきたい。

6．今後に向けて

前節の考察で述べたように，「主題による題材構成」に基づいた今回の実践においても，生徒が興味をもって学ぶことができた授業であっ

たといえるのではないだろうか。また，この主題に基づいて楽曲を鑑賞することは，生徒にとって身近な楽曲とのつながりを考えたり，音楽の意味について考えたりすることが可能となると考えている。さらに授業を改善し，生徒自身が，楽曲がもつ音楽の特徴について，自ら意味を見いだし，生涯にわたって音楽のよさや美しさを味わうことに繋がっていくようにしていきたい。

令和３年度に新学習指導要領が全面実施となっても，教科書で扱われる楽曲は同じものが相当数あると考えられる。引き続き他の楽曲においても，新しい視点における教材化を図り，音楽科での学びの深まりを実現させていきたい。

〔引用・参考文献〕

文部科学省（2017）『中学校学習指導要領』

岡田知也・堀田真央（2019）「新たな視点による中学校音楽科鑑賞領域における音楽の教材化に関する実践的研究（１）」香川大学教育実践総合研究第39号，pp.45－54

佐野靖他（2005）「鑑賞のもつ意味，可能性，課題を探る －《四季》（ヴィヴァルディ作曲）への多様なアプローチを通して」『音楽教育実践ジャーナル』vol2 no.２，日本音楽教育学会，p.32－50

杉町玲子・渡部成哉（2007）「中学校音楽科における教材としてのオペラ」千葉大学教育学部研究紀要第５巻，pp.113～120

野本由紀夫（2015）「鑑賞授業をクリエイトするために －交響詩《ブルタバ》の誤解を解く」『音楽教育実践ジャーナル』vol.12 no.２，日本音楽教育学会

加藤穂高（2015）「《ブルタバ》の鑑賞を通して何を伝えるか，何を学ばせるか」同上

髙﨑保男（2015）「26　アイーダ」『ヴェルディ全オペラ解説・３』音楽之友社

山崎晃男（2015）「第７章　音楽と感情」『音楽心理学入門』誠信書房

岡田暁生（2015）「メロドラマ・オペラのヒロインたち」小学館

堀内修（2017）「読むオペラ－聴く前に，聴いたあとで」音楽之友社

小瀬村幸子（2007）「オペラ対訳ライブラリー　ヴェルディ　アイーダ」音楽之友社

丸本隆・荻野静夫・佐藤英・佐和田敬司・添田里子・長谷川悦郎・東晴美・森佳子編（2017）「キーワードで読む　オペラ／音楽劇　研究ハンドブック」アルテスパブリッシング

Giuseppe Verdi「Aida」Full Score RICORDI

Giuseppe Verdi「Aida」Ricordi Opera Vocal Score Series RICORDI

使用したDVD

ヴェルディ：歌劇「アイーダ」レヴァイン指揮／メトロポリタン歌劇場管弦楽団，UNIVERSAL CLASSICS

使用したCD

ヴェルディ：歌劇「アイーダ」カラヤン指揮／ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団，LONDON